

追悼！ 湯口和三さんのこと

ふるさととは、遠く冷たかった。2004年、中国残留孤児国家賠償請求訴訟を岡山地裁に提訴した原告一六名のうちの一人。倉敷からは、もうひとり、鴨井千代子さんが加わっていた。

湯口さんは、一九四二年三月、京都伏見区深草に次女として生まれた。その翌年六月一歳三ヶ月、両親と姉、兄一家五人は満洲の開拓団として入植。実父は、職人であつたらしい。何か京都市の織物、染色業転業開拓団に係属していたのではないだろうか。

1945年8月9日、ソ連軍は満洲への進攻を開始した。両親、十二歳の姉、九歳の兄、三歳の湯口さん、生後三カ月の弟の一家六人の逃避行。撫順収容所にたどりついた。しかし、産後の母と弟は帰らぬ人となった。避難民の三分の二は餓死・病死したとの報告もある。翌年、父は、湯口さんを中国人夫婦に預け、姉、兄を連れて日本に帰った。

湯口さんは、養父母 王兆恩、王殷の下で中国名 王秀蘭となり育てられた。撫順は、露天掘りの炭鉱で有名である。養父母は、ここで働いていた。養父母は、湯口さんをとて可愛がり、大切に育てた。食べたい物やほしいものは、探して与えてくれた。また、学校から帰ると、食べ物を温めて待っているというやさしい養父母であつた。友達母親から日本人だと言われても信じなかった。

1949年撫順市勝利街小学校に入学、53年小学4年を修業。いわば中華人民共和国、建国の一期生にあたる。その修了証書は、カラー刷りで舞台の緞帳のようなデザイン。上段には五星紅旗の飾り、周りには稲穂、顕微鏡、本、鉛筆、モーター、ビル等が描かれ、更に湯口さん、十一歳の写真もはられている。長い戦いの末、得た中国建国の息吹と未来への強い願いを感じる。学校の方

中学2年までで、その後は、商店の売り子として働いていた。

しかし、養父が、湯口さん二十歳の時、その翌年、養母も亡くなった。塵肺による死去ではないだろうか。悲嘆に暮れる毎日だったが、養父の友人の紹介で、夫、海世清と結婚。夫も炭鉱で働いていた。次々と四人の男の子に恵まれ、子育てに一生懸命だった。

1972年の日中国交回復、湯口さん、三十歳。その翌年から、民間レベルでの肉親探しが始まった。1978年、日本に帰っていた兄が、撫順の湯口さんを尋ねて来た。言葉は通じなかったが、抱き合い、兄との涙の再会となった。本人確認の決めてとなったのは、湯口さんの左耳たぶの裏側にホクロがあることであつた。

これは、二年前に亡くなっていた姉が、三歳か四歳であつた妹と別れるとき、養父母宅に行き、迎えのことを思い、何度も抱き、身体に何か目印になるものがないかと探し、そして、弟に遺言していたのである。

1980年1月、湯口さんは、4人の子どもを連れて、備前市に住む兄の所に一時帰国。六ヶ月間を学校生活の体験等をしたりして、楽しく過ごした。その後、兄に身元引受人になつてもらい永住帰国する予定だったが、何度、手紙を出してもなしのつづでだった。永住帰国できたのは、十六年後の1996年であつた。この十六年間は、湯口さん一家の人生を狂わし、いまなお、その影響は続いている。

妹に返信できなかった兄の理由が何であつたのか、定かではないが、言葉の壁のある一家6人の帰国後の生活に関わることではなかったろうか。96年に夫と4男だけで、その2年後に、長男親子、次男夫婦、三男の6人が帰国した。湯口さんは58歳になつていた。広島県の自立支援センターで4カ月間の日本語の学習、ミシン工になるために、半年、訓練学校にも通い就職したが、言葉が通じないために解

日中友好協会岡山支部ホームページ
<http://rizhongyouthao.iinaa.net>
メールアドレス
rizhongyouthaohehuiokayama@yahoo.co.jp



雇、その後病院の掃除婦として働いた。夫は、ことばの壁や日本の生活になじめず、中国に帰ったりしていたが2003年、患い中国で亡くなった。

04年、人間の尊厳を守るために、集団提訴し、闘った。この運動の中で、06年開設された「倉敷日本語教室」に参加。湯口さんは、自宅を提供し、自らも日本語の勉強に涙ぐましい努力をかさねた。電子辞書を使いこなし、日本語で電話もできるようになった。94年の「円滑な帰国促進と帰国した者の自立支援」を目的とする自立支援法ができ、何度かの改正によって、問題はあるものの、平穏な老後を送れるようになってきていた。

湯口さんは、10年前、乳がんの手術をしたが、完治し、元気になつていた。「教室」の花見やいろんな行事にも参加していた。教室の昼食会でもしうと言つていた矢先、この三月、肺に転移しているのがわかり入院。7月二十三日、両親、養父母の下へ旅立ってしまった。

湯口さんのあの明るい笑顔が忘れられない。

湯口 和三(王 秀蘭)、辛苦了、感謝、安息地睡。享年八十二歳。合掌

山縣 武次郎



講演会参加へのお礼 鳥越英明

去る7月21日開催された日中友好協会井笠班結成記念講演会に、真夏で、ご多忙の中、ご遠方からも多数ご出席頂きましてありがとうございました。お陰で第2部で演舞していただいた、井原市太極拳協会井笠教室の10名の方々を含めて39名の方々がご来場くださり、井上正信弁護士（尾道総合法律事務所）を講師にお迎えしての集会は内容と出席者数の両面で成功裏に終えることができました。集会の準備のためにご協力くださった方々に紙面をお借りしてご報告と感謝申し上げます。

8月27日の井笠班理事会で、県連の宇野会長から「講師の井上弁護士が『講演会に呼んでもらいありがとうございました』と開催した事と講演を通しての感想との両面で好印象をお持ちでした」と聞きました。講演の内容については宇野会長が書かれていますので、私に許された字数の内で準備方の経験と感想を「勝手口」からお伝えします。井原市太極拳協会の木山会長は退院されて間なしのお体で演舞の企画を快諾してくださり、閉演後「先生は卒寿になられました」と出部教室の皆様に囲まれておられました。日中不再戦のために井笠浅口の地から平和と友好を発信します。

さらには中国を安全上の脅威と見なしているとの世論調査の結果です。

この一つ目の原因は、日本人が、直接中国に触れたり理解したりするための機会やチャンネルが不足していることです。

2 つ目は、日本メディアの偏り歪んだ対中報道です。双方の国民に直接的な交流のチャンスが乏しい中、テレビ・新聞・インターネットは互いを知るための重要なチャンネルとなります。残念なことに、日本メディアは中国に関するネガティブな報道で満ち溢れています。

この難局を打開していくために「百聞は一見に如かず、百見は一行に如かず」。着実に「Look at China, Go to China」を实践してこそ、リアルで客観的かつ全面的な中国を、バランスよく認識することができます。

中日両国の 2000 年に及ぶ交流の歴史が、私たちに繰り返し教えてきたのは、中日双方は協力すれば互いに利益をもたらし、争えば互いに傷つくこと、平和・友好・協力こそが両国にとって唯一の正しい付き合い方であり、最も信頼でき、コストのいい安全保障であることです。“

この後、会場を変えてレセプションが開かれました。残念ながら私は、2 時間の講演でエアコンの効きすぎにより身体が冷えて、これ以上の滞在は無理と判断し途中で退席しましたので、レセプションは他の参加者に記事をお願いします。

第7回西日本地区中日友好交流大会に参加して

真田紀子

2024 年 8 月 30 日の金曜日 15 時～岡山駅前のホテルグランヴィアで、標記のタイトルの交流会が開催されました。当日あいにくの台風直撃で、新幹線をはじめとして在来線も夕方から運休するというアナウンスがあったため、参加予定の 700 人には届きませんでした。500 人を超える人数ではないかと思いました。

この会は第 5 回まで大阪で行われていたそうで、昨年初めて香川県高松で開催され、今回岡山で行われたそうです。

記念講演は大阪総領事の^{せつけん}薛剣氏によって中国語で行われました。

前に大型モニターが 2 台設置してありますが、下の字幕は読みにくく、この文章はあらかじめ配布されていた日本語文を見ながら書きます。

“中国駐大阪総領事館は、今年一つのスローガンを打ち出しました。「Look at China, Go to China」です。私の深い懸念は、9 割以上の日本人が中国に好感を持っており...



次回の新聞放送作業は
9月26日(木)午前10時半か
ら民主会館で行います。
前回お手伝いくださった方
です。

犬飼
河井
真田

